



石巻市災害派遣レポート

横路 真彬

初めに石巻市の海岸部に到着したとき、とてつもない虚無感が自分を襲いました。小柳部長の大学校の知り合いの末永さんに崩壊した町を案内していただき、あるはずの街並みが瓦礫に変わっていて、わずかに残った建物からそこで人々が生活していたことがうかがえる程度でした。メディアが報じているものとは比べ物にならないほどの無情さがその地にはあって、いったい自分たちに何ができるのだろうと落胆しました。拠点になる石巻専修大学の横には積み重なったゴミの山があり処理も滞っている状態でした。

二日目からボランティアに参加し、各地から来ているボランティアの方々とたくさん会話をしました。やはり復興もままならないところも多いらしく人手はいくらあっても足りない様子でした。ボランティア初日は一般住宅の庭の泥かきで経験者の指示のもと皆で協力しその日の作業は終えました。範囲も狭く細かい作業ではありましたが、依頼者の方からとても感謝していただき、小さなことでも必要とされていてまだまだやれることははあるのだと実感しました。

ボランティア二日目はお寺の泥かきと支給品の搬入でした。初日の地区と違いかなり被害を受けている地区で漂流物が汚泥の中にかなりまぎれこんでいました。この場所は範囲も広く自分たちはほんの一角しかできませんでしたが、その範囲だけでも絶対きれいにしたいという気持ちでボランティア一丸となって作業に取り組みました。

たった二日間でしたが被災地での生活で、唯一救われたのは被災地の方々の前向きさとどんな些細なことでも誰かのためになるということを実感したことです。普段自分たちが何気なくやっていることが被災地ではとても貴重なことで、皆で協力してそれを大事にしていて、自分の生活を振り返らされることが多々ありました。また同僚との普段とれないようなコミュニケーションがとれ、同じ体験・時間を過ごすことでよりチームワークがうまれたのを実感しました。同僚だけでなく、各地から来ているボランティアの方々との会話をするうち、情報を交換したり気持ちを共有したり一つずつつながりが増えました。

この経験を通して学んだ人とのつながり・協力を大事にし、これから的人生の中で大いに役立てたいと思います。また被災地の方々に負けないくらい強く前向きに生きていくたいと思います。